

ルソー「対話録」余聞

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332945>

出版情報 : 文学研究. 42, pp.155-173, 1951-11-30. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



ルソー「対話録」余聞

永 田 英 一

ルソー¹⁾は、一七七〇年七月、長年の放浪生活からパリに舞いもどつて、プラトリエール街の旧居におちついた。そしてその間に綴つた「告白録」²⁾の草稿を諸所のサロンで読みあげたが、一向かんばしい反響はえられなかつた。そこではかれはこの弁明の書を補足するために、さらに強力な自己弁護の書考えた。それが「対話録」³⁾——ジャン・ジャックの審判者ルソー——であつて、これは一七七二年から七六年にかけて「胸をしめつけられながら」書かれたものだ。

- (1) Rousseau (Jean-Jacques, 1712—1778)
- (2) *les Confessions* (1782—1790)
- (3) *les Dialogues ou Rousseau juge de Jean-Jacques* (1780)

「対話録」は「ルソー」Rousseau と「フランス人」Le Français という二人物が、「ジャン・ジャック」Jean-Jacques なる人物を俎上にのせて、大いに論じる三つの対話からなつてゐる。「フランス人」は、巷間に流布された「ジャン・ジャック」にたいする中傷を信じて、これに敵意をもつ軽薄なフランス人のタイプ。「ルソー」は、これをはじめは「ジャン・ジャック」に偏見をいだいていたが、次第に眼をひらいて、これを弁護するにいたるフランス人、

——「ルソー」という名がつけられているが、必ずしも「エミール」*の作者とは考えられない。)

* *Emile ou de l'Éducation* (1762)

そして「ルソー」と「フランス人」は、大体、つぎのような題目について、打々発止ともいふべき議論を交す。——

第一の対話

公衆の賛同をえて、当局がとつたジャン・ジャックにたいする行動方式について

第二の対話

ジャン・ジャックの本性と、かれの習慣について

第三の対話

かれの書物の精神について、結語

要するに、この書の眼目は、「ジャン・ジャック」なる人物が、果して「怪物」*Monstre* なのか、それともたゞ誤解された「無辜の人」*Innocent* にすぎないのかどうか——という問題の究明にあると思われる*。——

* これについてランソンは「かほどの想像力とかくも素晴らしい論理が、このように用いられているのを見ることほど悲しいものは何もない」といつてゐる。——G. Lanson (*la Grande Encyclopedie*, t. 28)

けれども、いまは、——この「狂気の書」の内容について考えることをやめて、——この書に關聯して作者がその後にとつたかなり特異な行動について注意してみよう。というのは、この書には作者がみづから綴つた「補追」*が附

されていて、その中にこの哲学者の精神状態を知るためにかなり重要なものが含まれていると思われるからだ。

* *Histoire du précédent écrit*

そしてわれ／＼も主としてこの「補遺」によつて、この間におけるジャン・ジャックの内外両面のうごきを辿つてみよう。――

ルソーの「被害妄想」*Manie de la persécution* は、このころその極点に達していたと思われる。ルソーは、常住坐臥、自分のまわりに張りめぐらされた陰謀の網の目におびえ、人々の敵意をひし／＼と身に感じて慄然としていた。そしてかれの迫害者は、もうあの「哲学者」*les Philosophes* と呼ばれる人達やその一党だけではなかつたのだ。地上のあらゆる人間が、国籍の如何をとわず、また身分の上下をとわず、かれらに唆かされて、この忌むしい陰謀に加担していた。……そして、あの気の弱い、不器用な「ジュネーヴの市民」^{*} は、ついに、全人類の共謀によつて追いつめられ、「三重の暗黒の壁」の中に閉ぢこめられてしまつたのだつた！（すくなくとも当人はそう信じていた。）

* *Citoyen de Genève* ——ルソーが愛用した、いわばかれの唯一の肩書。

・こういう状態では、折角かきあげたこの弁明の書も、いまはこれをどうすることもできない。せめて未来のよりよき世代にまでこれを無事に伝達することができたなら！ といつても、現在これを何人に、また如何にして寄託すべきか。

二十年の経験からして、わたしは、友人の名の下にわたしを取巻く人々から、いかなる公正といかなる忠実を期待しうるかということを知っていた。……かれらにわたしの原稿を委ねることは、わたしみづからわたしの迫害者達にそれを手渡すことに他ならなかった。それに、このように捕えられてしまったからには、わたしにはもう他の何人にも近づく手段がなかったのだ。

そこでルソーの魂は、例によつて、「自己の潔白の感情とかれらの不正の感情に昂奮して、一切の秩序と一切の眞実の本拠」へ飛躍した。というのは、たゞ一筋に天帝にこの書を委託しようと思つたのだ。

ルソーはそのために早速この原稿の正確な写しにとりかゝつた。そして委託すべき祭壇は「こうした行動をできるだけ壮重にするために」パリのノートルダム寺院の主祭壇をえらんだ。こゝをえらんだのには、またつぎのような理由もあつた。他の教会ならば、折角の寄託物も、容易に僧侶達に横領せられ、結局、敵どもの手に渡るであらうが、こゝならば、こうした行動の風評から、もしかしたら、この原稿が国王の手許に達するかも知れないと思つたのだつた。

ルソーはまた写しをとりながら、いろ／＼と実行の手段を考えた。そしてついにその日取を土曜日ときめた。土曜日ならば、毎週ノートルダム寺院の祭壇の前では、聖歌が唱えられ、その間は内陣が空席になつてゐるので、目的を果すにはもつとも都合だと、この「臆病な男」は考えたのだ。そしてそれからルソーは幾度もノートルダムへ足をこんで、遠くから内部の容子を窺つてみるのだつた。……………

いよく原稿が出来あがつた。ルソーはこれを包装して、これにつぎのような献呈文を附した。

『天帝への寄託物』

『被圧迫者の保護者よ、正義と眞実の神よ、不幸な一外国人が御身の祭壇に供え、御身の攝理に委ねるこの寄託物をうけ給え。その外国人は、地上にたつた一人で、支持者もなく、守護者もなく、一世代全体から侮辱され、嘲笑され、中傷され、裏切られ、十五年この方（一七六二年「エミール」出版以来）死よりわるい取扱いと、人類間にあつて前代未聞ともいうべき数々の破廉恥行為を争つて背負わされ、しかも決してその原因を知ることさえ出来なかつたのです。わたしには一切の弁明が拒否されています。一切の交通が奪われています。わたしはもう、みづからの不正で苛立つた人間どもからは、侮辱と、虚偽と、裏切のほかには期待するものがないのです。永遠の神よ、わたしの唯一の希望は御身の上にあります。どうか御身の加護の下にわたしの寄託物をとり給え、そして若くて忠実な手の中にこれを落し給え。その手は欺瞞の加わらざるまゝにこれよりよき世代に伝達します。そしてその世代が、わたしの運命を憐みつゝ、惡意もなく紛飾もない一人の男、不正の敵でありながら、これを忍ぶに辛抱がよく、いまだ曾て何人にも惡をなさず、欲せず、報いることもしなかつた男が、この世代によつていかに取扱われたかということを知らうに。わたしはよく知っています、何人にも奇蹟を望む權利はないのです、圧迫され、誤解された無辜の人にさえないのです。万物はいつか秩序の中に還るべきものでありますから、待つておればよいのです。それで、もしわたしの労作が紛失しても、またそれがわたしの敵どもの手に渡つて、そしていづれ、これは不可避のことのように思われるのですが、かれらによつて破壊されたり、改竄されたりしても、それでもわたしは御身の仕業に期待するでし

よう、わたしはその時期も方法も知りませんけれど。そしてわたしは、当然のことながら、御身の仕業に協力するためにわたしの努力をなした上で、安心して待つています。わたしは御身の正義に信頼し、かつ御身の意志に身を委ねるものであります。

そして扉の裏には、第一ページに先立つて、つぎのような文言が記されていた。（これはこの草稿が誰かの手におちた場合を慮つて、特に書きそえられたものと思われる。）

「天がこの書きものゝ支配者たらしめた君が、たとえ何人であろうとも、君がこれを如何ように使用しようと決意したとしても、また君が作者についていかなる意見をもつていようと、この不幸な作者は、君の間らしい臟腑と作者がこれを書きつゝ忍んだ断腸の思ひにかけて、これを全部よみ終つてからでなければ処分しないように、君に懇願する。苦患にやぶれた心が君に願うこの好誼こそ、天が君に課する公正の義務であることを想い給え。」

こうしてすっかり準備がととのうと、ジャン・ジャックは原稿の包みをかゝえて、一七七六年二月二十四日土曜日午後二時ごろ、ノートルダム寺院へ向つた。いよくこの日かれの「供物」*Offrande* をその主祭壇に献げようといふのだ。

ルソーは寺院の横手の扉の一つから入ろうとした。が、その扉が閉つていたので、驚いて、さらに下手の、本堂に

面した脇扉から入ろうとした。そして一步踏みこんだ時、かれの眼は一枚の鉄格子にぶつかつた。その格子は「いまだ曾て目につかなかつた」もので、本堂と、内陣を囲む側廊の部分とを遮つていたのだ。

この格子をみとめた瞬間、わたしは卒倒する人のような眩暈に襲われた。そしてこの眩暈につぎいてわたしの全身中に大混亂が起つた。それはわたしの記憶ではいまだ曾て感じたことのないものだつた。

ルソーはパリ在留二十六年以来、ノートルダムへはしば／＼いろんな時に来たことがあつた。そしていつも内陣のまわりには通路が開かれていて、かれの「記憶するかぎりでは」一度もそこに格子や扉を目にしたことはなかつたのだつた。

わたしはわたしの計画を誰にも話していなかつただけに、それだけ一層、この不意の障害物に驚いて、その場の昂奮のあまり、神までが、人間どもの不正の仕業に協力しているのを見るように思つた。

ルソーは急いで教会を出た。もう二度とこゝへは来るまいと思つた。そしてその日の残りを、身も世もあらぬ思いで、あてもなくそこらを歩きまわつた。そして夜になつて、へと／＼に疲れて帰宅したのであつた。

ルソーは次第に冷静になると、その日の出来事を反省しはじめた。そして「独特のあの頭の廻転」によつて、まもなく別の角度からこの不首尾を検討するのだつた。……あの原稿が直接国王の手許に届いて、若き君主にみづから読

まれるなどという考えは、何とばかりしいものであつたらう。たとえこの委託物が宮廷に達したとしても、国王の手には渡らないで、「もつとも邪惡な迫害者達か、その仲間の手」に落ちて、まったく廢棄されるか、惡用されるかがおちであらう。こう考えると、事の不首尾は天の恩恵だつた。おかげで原稿はそっくり自分の手許に残り、より賢明にこれ処理することができ。——そこでかれは、今度はつぎのような手段をとることにした。

* ルイ十六世（当時二十六歳）

ルソーはこの頃、かれのもつとも古い知合いのある文学者^{*}が、田舎からパリへ出てきたということを聞いたばかりであつた。ルソーはこれを「天帝の采配」と思つて、その文学者を原稿の眞の保管者とときめた。というのは、その人は「哲學者、作家、アカデミシャン」であつたけれど、その人の誠實さはルソーの精神の中に確立されていて、「神もその仕業のために有徳人の手以上に立派な道具」を選ぶことができないからだ。

* 未詳。「告白錄」の原稿を託されたデュクロ（Duclos）ではないかとの説もあるが、デュクロは一七七二年に歿している。またルソーはこの「補遺」のはじめにデュクロが「友情のもつとも神聖な寄託物」を惡用したといつて、その「明白な裏切」を責めている。

ルソーは苦勞してやつとその文学者の住居をみつけた。そして例の原稿を狂喜して、また「おそらくかつて人間が美德にたいして表しえた最もふさわしい敬意である心臓の鼓動」をもつて手渡した。文学者はそれを受けとつて、この「寄託物」を誠実に取計うといつた。ルソーは満足して歸つた。

それから二週間してルソーはまたその文学者を訪ねていつた。いよく「二十年以来かれの眼の上にかけられてい

「暗黒の被布」が落ちる時がきたと確信して。……だが、期待したことは何も起らなかった。文学者はこの「寄託物」について、まるで閲読を請われた文芸作品のように語るのだつた。修辭上の注意など話して、この原稿やその作者についての感想は何ものべなかつた。そしてついにはこの「寄託物」を返却すると申し出た。ルソーはそれを断つて、たゞこの原稿を誰かもつと若い人に、「わたしやわたしの迫害者達より生残つて、いつか何人を傷つけるおそれもなくこれを公にしうる人」に渡してくれと懇願した。そしてすぐに飛び出して、それなりこの文学者のところへは行かなかつた。

ルソーはこの受託者について、どう判断してよいか、はつきり分らなかつたけれど、「目的を逸した」ことを感じた。どうやら骨折と寄託物を無駄にしてしまつたらしい。……けれども、ルソーはまだ失望しなかつた。考えてみれば、事の不成功は「まづい撰択」によるのだ。「自国の名譽に恋々として、その不正を表明することの出来ないフランス人に、また「あまりに慎重居士で、正義と被圧迫者の擁護のために熱することの出来ない老人」に、身を委ねようとしたのが大まちがいのだ。……………

ルソーはまた、新たな希望と熱意をもつて、原稿の淨書にとりかゝつた。そしてその仕事に従事している間に、たま／＼ある若いイギリス人が、イタリーからの帰途、パリに立寄つて、かれを訪ねてきた。この青年は、ルソーが前にヒューム²⁾に招かれてイギリスに渡つたとき、ウートンで隣人だつたのだ。藁をもつかみたいルソーは、また、これ

こそ「神が自分に選んでくれた受託者」だと思つた。青年、異国人、——文士達の詐略の外にあり、この国の策士達から遠くはなれ、ルソーを害することに何の興味も必要もない男。……ルソーは「この偶然の機会に神の指を見えるような気がして」早速これに飛びついた。しかし、筆写はまだあまり進んでいなかったたので、出来た分だけ手渡して、残部は翌年にまわすことにした。

- 1) ブルーク・ブースビー (Brooke Boothby) ——1760年ロンドンで「第一の対話」を印刷させた後、その原稿を大英博物館に寄託した。原稿を託されたのは一七七六年四月で、これには諸々の條件がついていたが、これを果す約束だった由。
- 2) Hume (David, 1711-1776) ——ルソーは一七六六年一月イギリスに渡り、はじめロンドン近郊に留つたが、同年三月ヒュームの紹介でその友人デーヴンポート (Davenport) の領地ダービシャー (Derbyshire) のウートン (Wootton) に移り、翌年四月までそこに滞在した。

ところが、この青年が出発してしまうと、ルソーはまたいろいろ考えて、こうした一切の手段にたいして疑念をいだくようになった。かれは、長年の経験から、自分に接近するもので、何人も「故意に派遣されないものはない」ということ、また自分を取巻く人々を信用することは、自分の敵どもに身を委ねることだということを嫌というほど知らされていたのだ。すると、自分の希望は空頼みだった。あらゆる方策、あらゆる苦心は無意味であつた。……

こう考えると、ルソーはまた新たな企劃を思いついた。それはフランス国民に宛てられた一種の「廻状」 *Billet circulaire* を作つて、そのコピーをたくさん取り、それを散歩道や街頭で「人相のもつとも好ましい」未知の人々

に配布することであつた。未知の人々の中には、ひよつとしたら、誠実な人がいるかも知れない。……

そこでルソーはビラの形でこの「廻状」を作成した。そして辛抱よく同文のコピーを多数こしらえた。

その「廻状」というのは、

「いまだ正義と眞実を愛するすべてのフランス人へ」

と題されて、内容はつぎのようなものであつた。

「フランス人よ！　かつて親切で優しくなつた国民よ、諸君はどうなつたのか。諸君は不幸な一外国人にとつて何と変り果てたことか！　その外国人は、たつた一人で、諸君のなすがまゝになり、支持者もなく、守護者もないが、正しい人民の間ならば、そのようなものを必要ともしないであらう。また何の紛飾もなく、悪意もないその男は、不正の敵でありながら、これを忍ぶに辛抱がよく、いまだ曾て何人にも悪をなさず、欲せず、報いることもしなかつたのだ。それなのに、十五年この方、諸君によつて恥辱と中傷の泥沼の中に投げこまれ、引きずり廻わされ、人類間にあつて前代未聞ともいふべき数々の破廉恥行為を争つて背負わされるのをいたく身を感じている。しかも決してその原因を知ることさえ出来なかつたのだ！　それではこれが諸君の率直なのか、諸君の温良なのか、待遇なのか！　フランス族、*Franks*（自由、率直の意あり）というあの古き名を捨て給え。それはあまりにも諸君を赤面させるといふものだ。ヨブ（Job）の迫害者も、人間を不幸なら

しめる術において諸君を指導する人々から、大いに学ぶことができたであろう。かれらは諸君に、死より百倍もわるい、こうした破廉恥な取扱いにわたしが値すると説得したのだ、いや証明したのだ。こうしたことは被告人に秘してやればつねに容易なことで、わたしには疑う余地もないのだ。事ここにいれば、わたしは諦めねばならない。というのは、わたしはかれらからも、諸君からも、一片の好意も期待しないし、また欲もしないからだ。しかし、かくも残酷な、またかくも恥づべき断罪のちに、わたしが欲し、かつ少くともわたしに支払わらるべきことは、それは要するに、わたしの罪科がいかなるものなのか、また如何にして、そして何人によつてわたしが裁判されたのか、——ということを教えてもらいたいということだ。

どうしてかくも公然たる醜聞が、わたし一人にだけ窺知すべからざる神秘でなければならぬのか。自分の罪は、自分が犯したということが眞実ならば、自分が何人よりもよく知つていなければならぬのに、それを当の罪人に匿すために、かくも多くの奸策や、詭計や、裏切や、虚妄を積みかさねてみたとして、何の益があろう？ 一体、わたしには全然わからない理由のために、曾ていかなる犯罪者も剝奪されたことのない権利¹⁾をわたしから奪おうとして、諸君が、わたしの悲しい余生を苦惱と、嘲罵と、恥辱とで満たし、しかもわたしがその理由を知ることが欲せず、わたしの不満、苦情、理由には耳をかしてくれず、さてはわたしに発言さえ許さない²⁾という覚悟ならば、わたしは、一切の弁護として、偽りなき一つの心と、いかなる悪にもそまぬ両の手を、天に差しのべるであろう。そして、残酷な国民よ、わたしは天に、わたしのために復讐し、諸君を罰するようではなく、（あゝ！ 神が諸君からすべての不幸とすべての過誤を遠ざけるように！）

そうではなくて、やがてこの老癡の身のために、もはや諸君の暴行の届かないような、よりよき住家を開いてくれるように願うであらう。”

「追記。 フランス人よ、諸君はわたしの生存中とはとても止みそうもない妄想の中に捕えられているのだ。しかし、わたしがもう地上から姿を消して、激昂が過ぎ去つてしまひ、そして諸君の怨恨も、煽り立てられることがなくなつて、本然の無私公平が諸君の心に話しかけるのを妨げなくなつた暁には、諸君は、わたしに秘して非常に注意ぶかくわたしの所業だとされている、口頭と文筆によるあらゆる事実、わたしの性格によるものと諸君が信じこまされている一切のもの、また御親切にもわたしのために諸君がやらされているすべてのものに、よりよく注目するであらうと、わたしは思う。そうならば、諸君はびつくり仰天するであらう。そして、現在ほど自己に満足しなくなり、諸君はこのビラを読むことを、今日そう見えるよりも、ずつと興味ふかいものと思うであらう。わたしは敢えてこのことを予言する。そして遂にあの紳士諸君（哲學者と呼ばれる人々）が、かれらのあらゆる好意の総仕上げとして、かれらが悶死させたともいふべきこの不幸者の生涯を、つまり、かれらがながい前からあれほどの秘密と用心をもつて準備していた、あの公平かつ忠実な伝記を、公にするであらう時には、諸君は、かれらの言説やかれらの証拠に信をおく前に、あのような熱心の根源と、あのような労苦の動機と、殊にかれらがわたしの存命中わたしにたいしてとつた行動とを探究するであらうと、わたしは確信する。かゝる探究がよくなされたとしても、わたしはこのことをはつきり宣言するのだが、――

というのは諸君はわたしの言うことを聞かずにわたしを審判しようというのだから——諸君はかれらとわたしとの関係をかれら自身の作物によって判断しているのだということをわたしは承認する。”

1) (原註) 一体、自然法と人定法とのかくも目にあまる侵犯が原理として善徳をもっているなどと、いかなる良識人が信じるであろうか。もし一個の人間から人間たる身分を剝奪することが許されるとしても、それはその人間を裁判したのちに始めて可能なことであつて、その人間を裁判するためにそうあつてはならない。わたしは多くの熱烈な死刑執行官を見るが、裁判官の姿はちつとも見たことがない。もし近代哲学の公正の掟がかくの如きものであるならば、その庇護の下に、無辜單純の弱者に禍あれ、殘酷狡猾の策士に栄光あれ。

2) (原註) 正しい理由はつねに傾聴されねばならない。特に、自己辯護する被告とか、あるいは不満を訴える被圧迫者の場合にそうだ。それなのに、たとえわたしが言うべき確乎たる何ものも持たないにしても、人々はどうしてわたしに自由に語らないのか。それはわたしの立場を徹底的に貶し、わたしの非難者達を完全に正当づける最も確実な方法なのだ。しかし、人々がわたしの發言を妨害するかぎり、あるいはわたしの言をきくことを拒否するかぎり、一体、何人が、わたしが言うべき何ものも持たないと言明して、無謀の譏をまぬがれるであろうか。”

ルソーはこういうビラをバリの街頭に立つて、道ゆく人々に配布した。けれども、これを受けとつて、見出しを読んだすべての人は、ルソーをして「苦しみの中にあつても失笑させるような率直さ」で、それが自分達に宛てられたものではないと言明した。ルソーはビラを取返してかれらにこういつた。

「なるほど、わたしの思い違ひでした。それは、十五年以來わたしがいかなるフランス人の口からも聞かなかつた唯一の率

直な言葉です。”

こうした拒絶にあつても、ルソーはまだ気を落さなかつた。かれは、どうしても自分に面会したいという未知の人々の手紙の返事に、この「廻状」の写しを送つた。またかれを訪問する人々にもこれを手渡した。けれども、こうしたことはすべて「わけのわからない、逃口上めいた返答」をえるのみで、結局、かれらの抜きがたい虚偽を証明することであつた*。

* ルソーは一七七〇年頃から自分の手紙の冒頭につきのような詩句を置いたと伝えられる。これはおそらくかれの自作の句であらう。

“*Tauxres aveugles que nous sommes !*

Ciel, démasque les imposteurs,

Et force leurs barbares cœurs

A s'ouvrir aux regards des hommes.”

“あわれ、われらは盲人なり！

天よ、山師らの仮面をはぎ、

かれらの野蛮な心を

人々の眼に開かせ給え。”

ルソーはこうして自分の運命を救うべき一切のこゝろみに失敗した。けれども、かれはこゝで翻然と悟るところが

あつた。

この陰謀は君にいかなる悪をなしたか。君から何を奪つたか。君の手足を切取つたか。君にいかなる罪を犯させたか。人々がわたしの胸部から、そこに包まれている心臓を抜きとつて、そして、生身のわたしに、悪徳漢の心臓を置換えないかぎり、かれらはどうしてわたしの実在を變質させ、變化させ、毀損することができ得るであろうか。かれらは一個のジャン・ジャックをかれら流に造り直そうとしても無駄であろう。ルソーはつねにかれらの好むと好まざるに拘らず同一の人間であるであろう。

ルソーはまたかれの流儀で、本然のジャン・ジャックに立歸つた。そしてそこに、空しく自己の外に求めていたものを見出したのだつた。

かれらが何と言おうと、わたしはわたしの良心の証言を携えて、かれらのあらゆる卑劣行為のつぐないを見つけるであろう。

ルソーの魂は、こうしてほとんど急角度に、高い諦感へと志向した。そしてかれの場合、その諦感は近い死と神の正義の觀念に支えられている。かれらが「手のこんだ暴虐をつくして、生理めにし、生殺しにする術」を見つけても、いまは何するものであろう。

かれらがわたしを知り、わたしを正しいと認めることが、どうしてわたしの永遠の幸福に必要なのか。天は、わたしの魂を幸福ならしめ、またかれらが不当にもわたしに苦しませた禍の償いをするために、他の方法を全然もたないともいえるのか。……わたしの前に永遠の柵が開かれるであろうその瞬間に、此方なる一切のものは永久に消えうせるであろう。そしてその

時わたしは人類の存在を想起しても、人類はその瞬間からわたしにとつては、いわば既に存在しないものに過ぎないであらう。

こゝにいたつて、ルソーは最後の覚悟をきめた。「地上につながる一切のものから解脱して、人々のなすがまゝに身を委せよう。自分の幸福は別種のものでなければならぬのだ。……そして靜かにわが身の解放の時と眞理の勝利を待つのみだ。」「地上的な一切の煩惱から離脱し、この世の不安や希望から解放」されれば、かれらもジャン・ジャックの心の平和を乱す手がかりを失うというものだ。

こうした儂い動搖につづいた平靜は、もう何ものもそこからわたしを引出すことのできない、恒久的な状態なのだ。

といつても、ルソーはまたかれの「義務」を忘れるものではない。「かれらに眞理を知らせるための空しい努力は免れたけれども、」「自分に關するかぎり、かれらを眞理に立歸らせる方法」を講じておかねばならない。そしてそれがまたこの「對話錄」の最後の処置法なのだ。

そこでルソーはこの書の原稿をたゞ一つに限つて、それを自分の知人で「もつとも不公平でなく、またもつとも偏見のすくないと思われるもの」か、あるいは「わたしの迫害者達と結ばれてはいるが、それでもなお魂の中に弾力性をもつていそうなもの」に、読みあげようと考えた。勿論をうしても、かれらがルソーの言分に耳をかさず、ルソーの運命に冷淡なことは十分わかつてゐる。けれども、――

わたしはこの最後の決心に執着する。なぜなら、それは神の仕業に協力するためのわたしに可能な唯一の手段であるからだ。

そしてもし、一切の期待に反して、たゞ一人でもルソーの「理由に心うたれ、眞実に気づきはじめる人」があれば、（そういう人は直感でわかるのだから）その人をこそ原稿の保管者ときめよう。そうすれば、その人は、いつか、「自然な変遷」が公衆の氣持を変化させたときに、「無限の名譽」をうけ、この寄託物から「大きな利益」を引出すであろう。そして公衆が「きわめて自然な心のうごき」から、少くとも「ジャン・ジャックが、もし發言の自由をゆるされていたら、言いたであらうこと」を知りたいと欲するならば、その時こそ、この保管者があらわれて、

——皆さんは、かれがどういふことを言つたろうか、ということが知りたいのですか。それちや！ これです。と、この寄託物を授けだしてくれ、ばよいのだ。そうすれば、この缺席裁判に附された人間の性格の上に、新たな光明が投じられるであらう。

またそういう人が見つからなくても、この書を読んだ記憶が、自分の死後ながく経つて、「公衆の逆上が弱まりはじめる時に」、誰かに「正義と同情」の感情を喚びおこすであらうから、この書を知らせる機会をすべて利用しよう。そしてどうしても信頼すべき人がなければ、自分は死の瞬間までこれを手放すまい。死後は自分の書類の運命がどうなるかと、構うことではない。

人間どもが何をしようとも、今度は天がその仕事をなすであらう。わたしはその時期、方法、種類は知らない。わたしの知つてゐるのは、それは最高の審判者が強力かつ正義であることと、わたしの魂が清廉潔白で、わたしの運命が不当であつたということだ。それでわたしには十分なのだ。そしてこれからはわたしの運命に屈服して、もう執拗にこれと闘うことはせず、わたしの迫害者達がかれらの餌食を好きなように処分するにまかせ、悲しい余生の間かれらの玩弄物となつて、何の抵

抗もせず、未来におけるわたしの名の榮譽と名声をもかれらの手に委ね、……もう何事が起ろうとも、一切、心を痛めないこと、これがわたしの最期の決心なのだ。

こうしてルソーはついに「自分のなすべきことをなした上で」、ひたすら平安な死を待つことにした。思えば、ながい動搖と迷妄と苦悩のうちに、ようやく靜謐な諦感の境地に辿りついたのだつた。地上的な、人間的な一切のものから解脱して、天上の偉大な存在と合一した、この不幸な運命人の清澄な境地——それは、ロマン・ローランも言うように、「いかなる西洋人もかくも完全に実現しなかつた、東洋の意味における法悦境」であつた。そしてこの境地にあそぶルソーの姿は、この書につづく「夢想録」の中に深い感動をもつて眺められるであらう。

- 1) Romain Rolland, J.-J. Rousseau, p. 37.
- 2) *les Rêveries d'un promeneur solitaire* (1782)

* 尚「對話録」の原稿は、一七七八年五月（死の約二ヶ月前）、「告白録」のそれとともに、ルソーの友人、ジュネーヴ市民ポール・ムルソー（Paul Moutou）に託された。